私は、微塵子。水溜りの中で生きているの。

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は、微塵子。水溜りの中で生きているの。

【Nコード】

N1099R

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

「気がついたら水中ってどういうこと？」

水中をさまよっていると、魔物が登場した。

「スライム？」

ここはもしかしてゲームの世界なのか？ 異世界なのか？

最初に出会うモンスターがスライムだなんてRPGの基本だな。そう思いながらも、私は落ちていた固めの棒を手にとった。

「気がついたら水中ってどういうこと？」
息できない！ …… ということはなかった。

ここはいったいどこだ？

フランクトン
浮遊生物のように水中をさまよっていると、向こうからゲル状の不定形な生き物が登場した。

「スライム？」

ここはもしかしてゲームの世界なのか？ 異世界なのか？

最初に出会うモンスターがスライムだなんてRPGの基本だな。
そう思いながらも、私はそこら辺に漂っていた木の皮の欠片だけが繊維だかわからないけれど、固めの棒を手を取った。

「それにしても、ああ、数が多すぎる。なんかこう、ばーんとやっつけられないかな。『ファイヤー』とか言ってる」

私は手を前に突き出して、妄想した。

なんか、でた。

世界が、世界が沸騰していく！

そして、道端の水溜りがひとつ、世界から蒸発した。

「……ああ、何もなくなっちゃった」

おそらく、この周辺に住む生物はほぼ全滅しただろう。

私はと言うと、しばらく青い空を見ていた。

世界から水が消えて、私は動く気もうせて……というか、動けなかったのだ。

魔法を使ったので、疲れたのかと思ったが、そうではない。もがくことはできるのだが、どうもこつも移動することができないのだ。

動けないのをいいことに、久しぶりにのんびりと空を眺めてみた。

青い空がきれいね。

ああ、星がきれいね。

何で、私はここにいるのかな？

考えてもわからない。

魔物はある、魔法は使える、そして何よりも気がついたら水の中にいて、水がなくなると動けなくなった。

「このまま、干からびて死んじゃうのかな？」

ああ、運が無いなあ。

しかし、この干からびた大地にその後3日ほどいたが、死ぬことは無かった。

3日目の昼。

空は雲に覆われて、水が降ってきた。

再び水に包まれる世界。

すると、私は動けるようになった。

「水があるところしか移動できないのか」

もしかすると、私は熱や乾燥に耐性のある水棲生物になったのか
もしれない。

「私は魔法の使える生物になっている……」

私はそうつぶやいて、気がついた。

「魔法で水作ればいいじゃん」

そう、水で身体を包んで、空を飛ぶ魔法でも使えば、水の外でも
歩けるのではないかと思いついたのだ。

「何でもう少し早く気がつかなかったかな」

「でたな、化け物！」

迷い込んだ白い草むらを歩いていたら、巨大な節足動物が目の前
に現れたのだ。

それはクモのようだが4本足で、頭は小さく、腹は丸みを帯びた
昆虫であった。

「いかにも血を吸いそうな、感じの虫ね。あゝ気持ち悪い」

近づくのも嫌な造形なので、遠くから燃すことにした。

「ファイヤー」

必要最低限の炎を投げつけると、魔物は炭になって崩れた。

「だいぶ魔法もうまくなつたわね。それにしても、この草むらはい
つ抜けるのかしら」

しばらく、白い草原をさまよっていると、初めて人とであった。

「君を迎えに来たんだ」

彼はそう言った。

「君も、気がついたらそうなっていたのだろうか？ 近くで魔力を感じたからさ、探しに来たんだ。僕らは仲間を探しているんだ。そうすれば、僕らが何なのか分かるかもしれないから」

彼が言うには、私のように気がついたらこういう風になっていた人たちが集まる町があるらしい。私は彼の誘いに乗り、その町へ行くことにした。

「今から、移動魔法で町まで飛ぶよ」

私は町にあつという間に着いた。

「ここが僕らの町さ。今は100人ほど生活しているんだ」

水の中に町並みがあった。この町は、魔物除けとか乾燥防止の结界がはつてあるらしい。

「おお、新入りさんか！」

「そう、猫の体表で迷っていたんだ」

「え？ さっきのところ、猫ちゃんの上だったのね？」

「そう、だからあそこはダニだらけだ」

どうやら、私の身体は微生物並みに小さくなっているらしい。

「ここが地球なのか、そうではないのか、僕らには小さすぎてわからないんだ。でも、魔法が使えるっていうことは、地球では無い可能性が高いというのが、今の僕らの見解なんだよ」

彼の話から、学ぶことは多かった。

魔法が使えること、襲ってくる微生物まてのがいること、体が小さいこと、水に包まれて無いと移動が困難なことを除けば、人間であったときと変わらない生活ができるらしい。

「でも、本当にゲームみたいな世界ね」

「そうだろ？ 魔法とか魔物との戦闘とか、本当にどうかしているよ」

彼はそういって肩をすくめる。

「私は、こういう世界も悪くないと思うけれどね」

私は笑って見せた。

分からない事だらけで大変だが、魔法に魔物に現実味を帯びていない現象は、なんだか刺激的でステキだったのだ。

私は、その町に暮らし始めた。第2の故郷である。

結界を張っていても、時々侵入してしまう微生物まものをけちらしながらも、小さくなる前と同じような生活を送り、平和な町で暮らしていた。

しかし、私にはやりたいことがあった。

そして、私は決心した。

「いつてきます」

私は今、仲間を探す旅に出る。

私のように、この世界に小さくなってやってきた仲間を探すのだ。強力な魔法が使えるから、自ら志願した。それに、町へあつという間に戻れる魔法も習得したということもある。

「あまり無理はするんじゃないぞ」

「はい」

私は、水たまりの町を出た。

私が彼にしてもらったように、さまよう仲間を見つけ出すのだ。

そしていつの日か、分かる日が来るだろうか。

自分たちは、なぜ生きているのか。

何のために、ここにいるのか。

それが分かる日が、来るのだろうか。

「ま、そもそも普通に人間だった時は考えたこと無いから、答えなんて分からないものなのかもしれないね」

私は、ここにいて生きている。それが分かっているだけでも、いいのかもしれない。

私は微塵子^{ちじんこ}。気楽に世界を浮遊する生物。

うん。そう、だから

気ままに、気ままに、この旅路を歩いていこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1099r/>

私は、微塵子。水溜りの中で生きているの。

2011年10月9日17時58分発行